

発達障害に対するイメージと態度についての検討

—教員志望の大学生と一般大学生に着目して—

内 藤 円 佳

本研究では、教職を志望しない大学生と比較して、教職志望の大学生が、発達障害に対してどのようなイメージと態度を持っているのか検討した。A県内の大学に通う教職志望の大学生130名、一般大学生114名に対して、質問紙調査およびオンラインでの調査をおこなった。

研究Ⅰにおいては、教職を志望する大学生は教職を志望しない大学生と比べて、より発達障害に関する知識があり、経験もあるということが示唆された。一方で、教職を志望する大学生は教職を志望しない大学生に比べて、イメージがポジティブであるとは言えず、態度も肯定的であるとは言えなかった。さらに、発達障害に関する知識と経験が発達障害に対するイメージと態度に及ぼす影響を検討した結果、教職を志望する大学生は発達障害に関する知識が高いほど、イメージがポジティブであり、発達障害児者が周りの人と関わったり社会に参加したりすることや、社会における発達障害児者のための制度を整備することなどの理念に、より肯定的な態度であるということが明らかになった。教職を志望しない大学生においては、発達障害に関してより経験がある人ほどない人に比べて、イメージがポジティブであり、態度が肯定的であることが示唆された。また、教職を志望するかどうかで区別せず一般的に大学生においては、知識と経験があるほどイメージがポジティブであり、経験があるほど頼り肯定的な態度であるということが分かった。

研究Ⅱにおいては、自由記述の回答データから、教職大学生が一般大学生と比較して、発達障害児者との関わりについてどのような態度であるのか、探索的に検討することを目的としていた。分析の結果、発達障害児者と関わる前提としての『姿勢・意識』や『理解』をするという【抽象的】な態度、「困難・苦手を支援する」などの【具体的】な態度、またどのように関わればいいのか【わからない】という態度、発達障害児者との関わりに【消極的】な態度が示された。また、教職を志望する大学生は、教職をしない大学生よりも、【抽象的】態度を重視していることが示唆された。また、発達障害のある生徒を担当することについてどのような態度であるのか探索的に検討することを目的としていた。分析の結果、関わり前提としての『姿勢・意識』や『理解』をするという【抽象的】な態度、『当事者への支援』『クラスへの支援』『連携』『体系的』などの視点から支援する【具体的】な態度、発達障害児者との関わりに【消極的】な態度が示された。また、一部の大学生にとっては発達障害をもつ生徒を担当することで『ポジティブ』あるいは『ネガティブ』な感情を引き起こすことが示唆された。